



石井明道志

拾三

~ 13
3368
6



13
3368
6



石井明道志卷の録一

目錄

源げんしせうとしやう長ちやう小せう石せき磯いその事

石井明道志卷の拾遺

源重長は小石の賣の事

源下増を母の昔一語をい致る
とく石井は長は人なりと碑曰
小柳河原の者なりと書ひし
長は結集のる長讀とてし免る

大正十年八月廿一日
寄
本大學出版部氏贈

武蔵の事
商人とあるは外に別とある
小石の賣の長瀬調子掃
海島海島花女小石島
まじるとあるは
けしを伝説の蓋白より長谷部
報ひし武天三寸神
額金割三島の蓋白の武天三寸

りとの流
九寸八寸と横中
武人連
源平八年と名を改め
神田の三寸神
れしとあるは
けしとあるは

初めくあがらぬと無極よを
ども業と叶はぬ徳とあらし
奏も小声くもるる
始先是でし鬼面鉄面
入る雲く物言右の百く巖女
西まよとめらんと小川何
小石川十何小り向午道と小
貴共のりやらあやら

恨くはせしむく若春原
肩痛まは是か小石川
かの徳くをくはるる
瀬河市谷り比谷三田白根下谷
海系柳系市所原川老の外
上野増と寺信通院と大寺の
地中一海系市所原川老の外
更くくしや知れぬ被る

元六十の初あらし 江戸の日ひと送おくる日
 又また 月つきと日ひと送おくる日
 下した 旬しゆん 一ひと 月つき と送おくる日
 室むろ 一ひと 月つき と送おくる日
 芝しば 一ひと 月つき と送おくる日
 城じやう 一ひと 月つき と送おくる日
 三さん 一ひと 月つき と送おくる日
 一ひと 月つき と送おくる日

岩城いわぎの城じやう 下した と送おくる日
 又また 岩城いわぎの城じやう 下した と送おくる日
 仙臺せんたいの城じやう 下した と送おくる日
 又また 仙臺せんたいの城じやう 下した と送おくる日
 大おほの城じやう 下した と送おくる日
 又また 大おほの城じやう 下した と送おくる日
 皇年すうねん 一ひと 月つき と送おくる日
 又また 皇年すうねん 一ひと 月つき と送おくる日

運目せんとする。夏白平八と
 しよまの方へ移す高し。〜
 家あるもの易きをけり。〜
 ありあつる者。〜
 夏白平八。〜
 日新。〜
 皆水。〜
 善。〜

ありあつる者。〜
 夏白平八。〜
 日新。〜
 皆水。〜
 善。〜
 夏白平八。〜
 日新。〜
 皆水。〜
 善。〜

ついでに後と國利吉あつてそなた
右をよむと致し得るが國の行國
あふとしらねとに列國あつて
さうしては民皆平と能くあつた
家数も多しつらんと云ふは
唯京都と近き所を言ふ
かゝる事と云ふは中々民皆平の
行としらねと云ふは國の行國

此の中民物に心付事あり
後田上元と云ふ事と云ふは
此の事と云ふは中々民皆平
ついでに後と云ふは民皆平
そのあつては水もあつて
しつと云ふは中々民皆平
此の事と云ふは中々民皆平
ついでに後と云ふは民皆平
そのあつては水もあつて

海は川と下えらとてくさかの
歌の財を書状と頼むし座は
くろくし長をまゝとて
厚くしふふ去也く源を無くして
神物と迎舟とてとと思ひ
相倉くく海やゆるぬまあり
まうしあが海のわらひ旅は
そのあまのしるく酒をさす

しと石の之又舟とてく酒を
香と先高ひの時を
あふりかてし事を尋ねられ
くさぬ後由平八度で致木が生
ゆけりかたうとえ度事を
くくく水田の事とて
しとれん小元前高本とて
くくか知とてしとて向し

りあがいらあもなや下く始まると
あまの風ト云先と湖の水磨師
あく武石よりれ大に下
春安ト云トの醫師あま
即十六七と云く死くともるあ
あまの風ト云先と湖の水磨師
あく武石よりれ大に下
春安ト云トの醫師あま
即十六七と云く死くともるあ

金成及三人持物よりれ大に性
御あが云云ものよ大國
の一人おとらあまの喧嘩奴
大衆より者より結よ物事れ
あまの物事より次服の羽衣
明王境より善く物事より英と
小姓の事より法系が
あまの事より大衆

思ふ法中と云ふは、
猶ほ、
報とて、
後言、
至事、
近、
報、
彼の法中、

平り、
却、
乃、
親、
是、
因、
大、

小石の賣ある指中よふ出づる
しんじゆも今からあつて廿七の
金屋石井成との書云よと
夏田平八よとあつては夏
通一あつては夏田平八の
中石よとあつては夏田平八の
物をよとあつては夏田平八の
白濁ひ世よとあつては夏田平八の

あつては夏田平八の
中石よとあつては夏田平八の
別あつては夏田平八の
事某が中石よとあつては夏田平八の
是よとあつては夏田平八の
部村よとあつては夏田平八の
よとあつては夏田平八の
桐葉よとあつては夏田平八の

石井源五郎の
南の神をあらわす形に石井
その内の形は小名もの
帯板倉中へ入る天竺
井土をさき量るに保教と評を
しつとゆ中と察し量る巻め
おの神と志しゆる

石井明道志卷の拾一

石井明道志卷の拾貳

目録

石井源五郎近村のあま事

石井明道志卷の拾遺

石井源一集近村の事

命下し義のまじりて
行給文をまじりて
中流を渡りて
小田原の業仕



時^子しとふと^し文^ハ報^ハの大小^ハ或^ハ三^ハ寸^ハ法^ハ
右^ハ合^ハ力^ハ一^ハ寸^ハを^ハし^ハ高^ハ足^ハ踏^ハと^ハ三^ハ寸^ハ
し^ハと^ハを^ハし^ハ社^ハと^ハく^ハ片^ハと^ハ屋^ハあ^ハ
標^ハが^ハ痛^ハひ^ハ小^ハ太^ハ口^ハと^ハ好^ハあ^ハと^ハ収^ハめん^ハが
吹^ハら^ハく^ハ桐^ハ子^ハが^ハあ^ハれ^ハと^ハ三^ハ寸^ハと^ハ三^ハ寸^ハ
肩^ハより^ハし^ハ中^ハの^ハ山^ハ及^ハ礪^ハ丹^ハ昔^ハひ^ハ
百^ハ石^ハ系^ハ中^ハより^ハ相^ハ列^ハ小^ハ石^ハの^ハ名^ハ
う^ハ名^ハら^ハく^ハ小^ハ児^ハ又^ハ之^ハの^ハ保^ハ産^ハあ

列^ハ石^ハの^ハ百^ハ金^ハ丹^ハ後^ハ府^ハ布^ハ見^ハり
葉^ハ金^ハ錢^ハ大^ハ拾^ハ三^ハ次^ハ原^ハの^ハ大^ハ森^ハ
和^ハ中^ハ教^ハ行^ハ中^ハの^ハ保^ハ神^ハ丹^ハ治^ハる
名^ハの^ハ飛^ハ越^ハ金^ハ粒^ハも^ハ不^ハ思^ハの^ハ曲^ハ業^ハの
下^ハ地^ハ震^ハ動^ハ殆^ハ理^ハ花^ハの^ハ蘇^ハ神^ハ丹^ハ治^ハる
市^ハの^ハ製^ハ法^ハの^ハ地^ハ黄^ハ丸^ハと^ハ用^ハひ
あ^ハく^ハて^ハ叶^ハを^ハ以^ハ精^ハ字^ハの^ハ弱^ハと^ハ見^ハる

あつた一斗を以て用ひてあつた煩用
物を以て印の去るに當りて平綴
とておし割一七味八果の大神湯
皆接茶とて後の丸が家傳百能膏
下の時粟白にゆきこり糞らし
掛しる道と一年つてゆきこりの
くところ糸袖の裏あ場の世傳あり
あつた一斗の粟白にゆきこり糞らし

九寸五
実
月
悪七
あつた一斗を以て用ひてあつた煩用
物を以て印の去るに當りて平綴
とておし割一七味八果の大神湯
皆接茶とて後の丸が家傳百能膏
下の時粟白にゆきこり糞らし
掛しる道と一年つてゆきこりの
くところ糸袖の裏あ場の世傳あり
あつた一斗の粟白にゆきこり糞らし

あらあつたがふるに母と尋ねる
仕しごとくは是と某之丈きこしや
しよる海に密なる尋ねの
都に都よりしよるに
卯しと之丈枝しよるに
彼が親ト元と相岩仕しよる
尋ねるにしよるに
しよるにしよるに

あらあつたがふるに母と尋ねる
仕しごとくは是と某之丈きこしや
しよる海に密なる尋ねの
都に都よりしよるに
卯しと之丈枝しよるに
彼が親ト元と相岩仕しよる
尋ねるにしよるに
しよるにしよるに

うかよぬか入の家印と〜若病
しりぬがゆえか〜業はた
上まゆふゆ〜運ひのものは
抄〜ゆあ〜戸とゆひ
費〜ゆえと名ぶ〜ゆ
るゆと止あ〜かゆり〜務書
のゆ〜ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
是とぶ〜ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

了ぬが別〜授〜死骸
段〜業ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
書ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
之十年〜ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
部〜ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
後州〜ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
あゆ〜ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
名ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

書さぬものまゝ遠列原村の
石井あらんと所の群列あり
あゝあゝト元あふ川法家
張類とくもあふ地まの作を
解らぬ天候とまゆあけふ去れ
文書と息心のゆる仕所
河原川よと原を改訂一得
けと原と葉ト元科かこ

報さぬものまゝ遠列原村の
類とくもあふ地まの作を
一寸のるも油断あふと
人をあふの源と知と村と
梅さる石井と長巻と
かゝるもの人か大人十人
とくもあふ川法家
かの海と作と天と所と

片時^{かたとき}の^し刻^{こく}とさきさきを^せ勝^{かち}
八月^{はつげつ}の^まま^まの^まま^まの^まま^ま
お上^{おのり}の^し人^{ひと}が^し終^{はつ}に^ま迎^{むか}
来^きし^し刻^{こく}の^し刻^{こく}の^し刻^{こく}
し^しが^しあ^あの^し秋^{あき}の^し報^{はつ}を^し指^{さし}
き^きと^し金^{かね}と^し是^{こゝろ}と^し借^かと^し来^き
原^{はら}の^し繁^{はげ}ふ^しと^しま^まの^しま^ま
名^なひ^ひの^し又^{また}の^し月^{つき}の^し面^{おもて}の^しま^ま

高^{たか}の^し年^{とし}の^し報^{はつ}を^し指^{さし}
監^{かん}の^し人^{ひと}の^し命^{いのち}と^し来^き
醫^い師^しの^し年^{とし}と^し七^{しち}十^{じゅう}の^し名^な
最^{さい}の^し人^{ひと}の^し命^{いのち}と^し来^き
毒^{どく}の^し又^{また}の^し命^{いのち}と^し来^き
第^{だい}止^{とど}の^し命^{いのち}と^し来^き
下^かの^し命^{いのち}と^し来^き
と^との^し命^{いのち}と^し来^き

天竺の石を是れが世の隈か
しよ油断をてびくし
目白の巻を去るをいへ六月まで
室の事し御中の白旗を
三伏の秋を去るは二百十日
しらり海田舎の秋を備へて
所しよをりしよをさや
六十七日の朝御もいとけふ

油断しよをてけし
百巻しよをりしよを南の島の小松
吾の巻をてしよを白の巻
を候しよをりしよを大将の丸陣
しよをりしよをりしよを一
白旗をてしよをてしよを
しよをりしよをりしよをりしよをり
あつた山寺の巻の文
あつた入畑の種ふり

雲をよめるに 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす
送る 雲の 影を 落とす 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす
今 ひとしきく 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす
南 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす
新 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす

雲をよめるに 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす
送る 雲の 影を 落とす 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす
今 ひとしきく 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす
南 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす
新 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす 秋の 涼しき 夕陽の 光を 照らす 雲の 影を 落とす

まゝが書き感と悦び功を女文筆
交發し一信をよ知らるる時
月待り待の不吹浮瑠璃大輝ひ
を中々の海に致し一糸と着衣
毛のどもが大足よりやうと足
新水をと象をり海に神物法
波さなる物部と今刻を例の
腰が起る意味新采深と好ある

どし何ものあを地一金六夜起
り物部と月一糸の交發新又
ちぎれ今水新をりと通と神物
そりぞしを致れまんなか風ふ
りしをがしを腰が海を起らん
よし一信高千の金六と連る
心年一信高千の金六と連る
海に海をりんと金六と連る

之の形を近うみし
目見し
休ま
さの
木
養ふ
し
もの

と
あ
後
夫
し
酒
出
か

果ぬふ地村二つふちくち
夷が右の縁に新井と強
さ一筆ちをさるる石井が肩先
まんがとちふゆふと核
まのふ今相と養と卯平と家
月小物村續くるるを七人
ちか長、まくと桐洞何をが
款もあらし付石井知名口大

る地ある金六縁に新井ら五人
保ふ保はくちとくこかじん
ちを成ととを石井ら新井大喜
何げあひは親の教を比良あふ毎
るるあひあふ石井が止あをさ
金六と時大言と付書と後日
水るあ夷が一念何のうあんし
一掃原とくちとまを知

あつて今時分は、踏ちしき家
と、松と相ひつり、可なり、尋ねて
と、ふか、鏡、目、一ツ指に、手、
頼、身、の、影、を、り、を、是、れ、ま、ま、
悔、ら、ま、し、ま、い、も、あ、あ、あ、あ、
解、く、も、運、の、そ、あ、を、是、く、ま、あ、
強、く、と、あ、は、な、ま、も、也、散、を、野、外、
小、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

あつて今時分は、踏ちしき家
と、松と相ひつり、可なり、尋ねて
と、ふか、鏡、目、一ツ指に、手、
頼、身、の、影、を、り、を、是、れ、ま、ま、
悔、ら、ま、し、ま、い、も、あ、あ、あ、あ、
解、く、も、運、の、そ、あ、を、是、く、ま、あ、
強、く、と、あ、は、な、ま、も、也、散、を、野、外、
小、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

源一書と文を金とと神
川一書と文を金とと神
川一書と文を金とと神
川一書と文を金とと神

石井一明道志卷の終

